

# 熱田神宮 宝物館だより

熱田神宮宝物館  
編集 内田雅之

〒456-8585  
名古屋市熱田区神宮一丁目1番1号  
TEL (052)671-0852 FAX (052)671-1202  
(年6回発行)

6月展示品より



面裏

しおふきめん 潮吹面 木製漆塗 面長 24.0cm 面幅 18.4cm 1面 室町時代

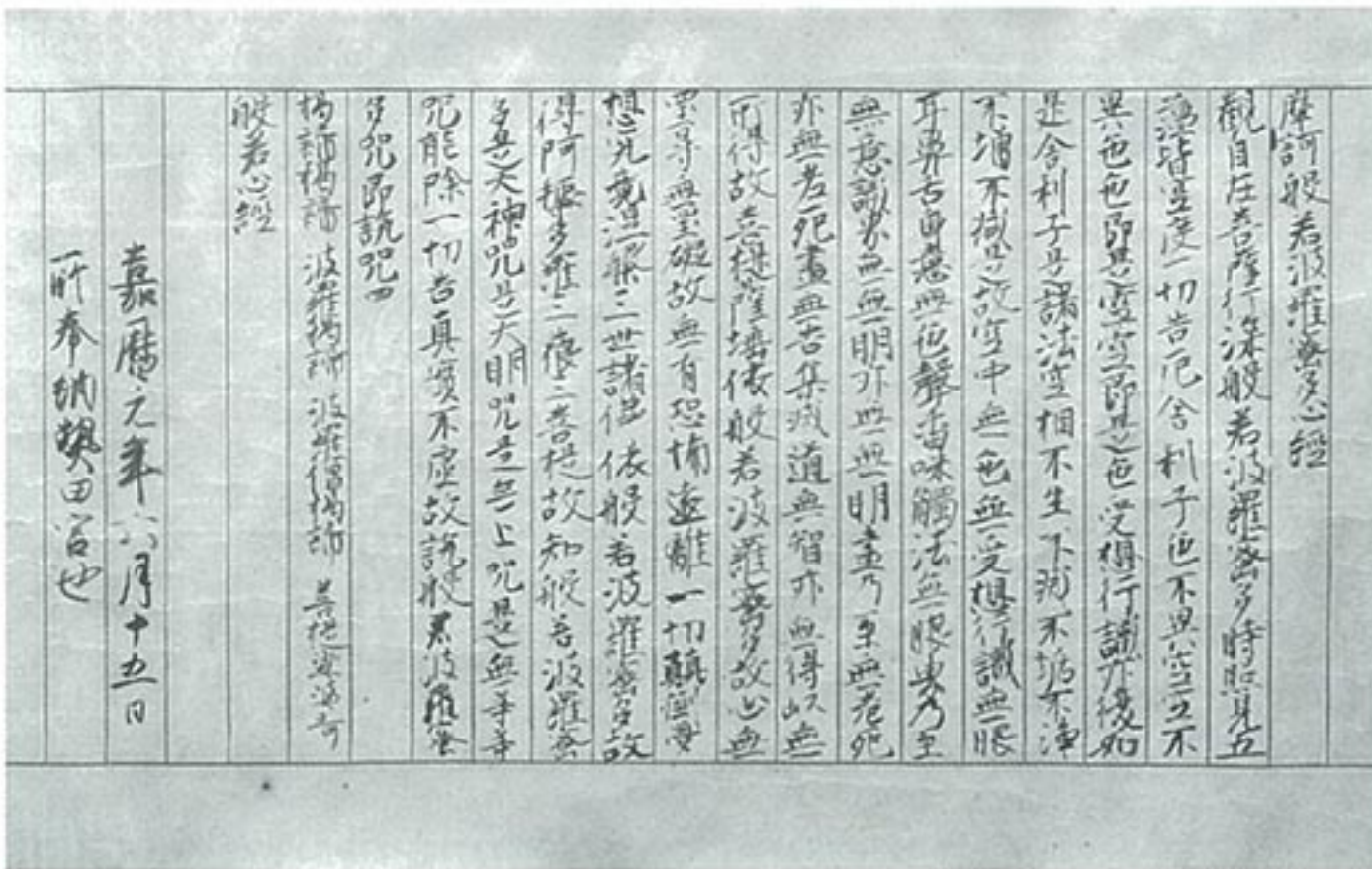
一見微笑んだ表情に見えるが、目や鼻、皺までもが右側に歪められた特異な容貌となっており、現存する仮面の中にも類例はみられない。そして、頭頂部には孔が一系列に穿たれており、製作当初は植毛がなされていたことが窺える。面表は漆のみが塗られ、彩色はなされていない。面裏は木地のままで、粗い鑿目が遺されている。

また、歪んだ表情の仮面として空吹面が挙げられるが、本面は空吹面の形式が確立される以前に製作されている事から、その関連に興味をもたれる一面である。残念乍ら、当神宮に伝えられた由来・用法については詳らかでない。

# 5月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

4月26日(金)～5月28日(火)  
(期間中無休)  
※展示品は毎月入替いたします

## —コーナー展「元号～御代がわりをむかえて～」より—



愛知県指定文化財  
はんにかしんぎょう  
般若心経 1巻 鎌倉時代  
縦 27.3cm 長 64.0cm

料紙は斐紙で、銀で罫を引き、1行17文字の般若心経を書写している。表紙は金銀切箔を置いて砂子を蒔き霞引とし、見返しも霞引に銀の切箔を蒔いている。裏は銀の霞引に金散らしと切箔を置いた華麗なものである。  
(1326)  
巻末には別筆で「嘉暦元年六月十五日 所奉納熱田宮也」と、奉納に関する奥書が記されている。

尚、嘉暦の元号は『唐書(旧唐書)』の「四序嘉辰、歴代増置、宋韻曰、曆数也。」から採られている。



しょうちくそうかくそうとうきょう  
松竹双鶴双桐鏡 1面 室町時代  
面径 29.8cm

界線に単圈を用いた大型円鏡である。中央に亀甲鈕を据えているが、上部に二個の鈕を鑄込んでおり、懸鏡として使用したものであろう。鏡背文様は構成された連続図ではなく、上部に桐花、内区を隔てて左右に鶴、下部に松と竹がそれぞれ個々に配されている。

(1570)  
鏡背に「奉寄進 熱田太神宮 御宝前 永禄十参年五月吉日 施主羽祢田宮千代」の寄進銘がある。

尚、永禄の元号は、『群書治要』の「能保、世持、家、永全、福祿、者也。」から採られている。

## その他の主な展示品 ◎重文 ○県文

- 《書跡・絵画》 ○寛永十三年熱田万句 熱田年中行事絵巻 松濤月明図-西山翠嶂筆- 他
- 《工芸》 ◎襪 ◎錦包挿鞋 ◎黒漆平胡籬 ◎金銅装唐鞍 ◎黒漆総覆輪鞍 色々威具足 他
- 《刀剣》 ◎太刀 銘 宗吉作 ◎太刀 銘 備州長船兼光 ◎太刀 無銘(伝真長) 太刀 銘 雲次 他
- 《コーナー展示 元号～御代がわりをむかえて～》 ◎後花園天皇宸翰御消息 ◎日本書紀附 寄進状
- ◎木造舞楽面 貴徳 ○瑞花双鳳文八稜鏡 ○大鈴 ○尺八 ○金銅釘隠 ○極細字法華経 蓬莱鏡 他

## 6月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

5月31日(金)～6月25日(火)  
(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

— 展示品より —



やまとたけるのみこととうせいのず  
日本武尊東征之図 1幅 現代  
絹本着色 縦151.4cm 横87.6cm

景行天皇四十年、東征の命を受けた日本武尊は駿河国に至り、そこで賊に野での狩を勧められる。本画はまさにその進言の場面を描いたと思われ、高貴な顔立ちの尊と、跪きつつも何か隠すかのような面持ちの賊との対比に緊迫感が表れている。本紙向かって右下には奉納年紀が皇紀と元号であらわされ、落款を記す。

本画は小山榮達(1880～1945)が描いたもので、皇紀二千六百年の翌年、昭和16年に奉納された。軸裏の上巻部には、本画の名称を記した題箋が貼られ、「振興美術院 主宰 大澤政五郎」と、奉納者の墨書名がある。

榮達は小堀鞆音らに師事し、土佐派と狩野派を学んだ。師と同様、軍記物語、有職故実に長けた作品を多く遺している。

## その他の主な展示品

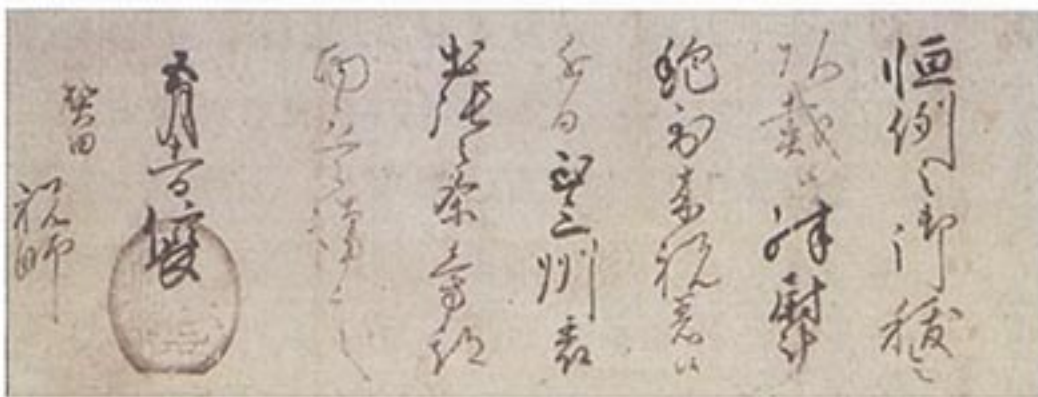
◎重文 ○県文

- 《書跡・古文書》 ○「熱田太神宮」神号-後水尾天皇宸筆- ○寛永十三年熱田万句 ○極細字法華経 他  
 《絵画》 日本武尊霊剣図-猪飼嘯谷筆- 蓬莱仙境之図-石川英鳳筆- 年中行事片々-石川英鳳筆- 他  
 《工芸》 白色翁 延命冠者 蒔絵色紙箱「稔り」-室瀬和美筆- 象嵌臙銀花器「山河」-中川衛筆- 他  
 《刀剣》 ◎太刀銘国友 ◎剣銘吉光 ◎剣銘包利 ◎短刀銘<sup>国光</sup> 徳治三年(以下切) 他  
 《コーナー展示 金工品の世界～和鏡と中国鏡～》 ○瑞花双鳳文八稜鏡 ○瑞花双鳳文八稜鏡 蓬莱鏡  
 菊散双鶴鏡 籬菊双鶴鏡 木瓜紋双鶴鏡 流水文鏡 饗饗文方鏡 盤龍鏡 連弧文銘帯鏡 海獸葡萄鏡 他

## —展示品より—

## 熱田神宮にまつわる神々と偉人たち（その9） ～愛知の三英傑を見てみやあ!!～（1）

「熱田神宮 創祀千九百年」 斎藤吾朗筆



織田信長黒印状（部分）

前回の「その8」では足利将軍家と熱田との関わり、そしてこの絵を描いた斎藤吾朗さんのお人柄を紹介させて頂きました。今回は皆さんもご存知の愛知県民が誇る三英傑を中心にお話しを進めさせていただきます。

下段の拡大図、向かって右下に坐している緑の肩衣かたぎぬを着た人物が織田信長です。信長と熱田の関わりとして一番知られているのが、桶狭間の戦いおけはざま（1560）のことだと思います。永禄3年5月、今川義元が尾張国に侵攻して来ます。19日未明、突如出陣を命じた信長は慌ただしく清洲（須）城を後にします。その際お供の家来は岩室長門守以下5名。清洲（須）からおよそ3里の道のりを一気に駆け熱田に向かったと『信長公記』しんちやうこうきには記されています。

午前7時過ぎ、当神宮に到着した信長は、家来を鼓舞するため、神前で必勝祈願をしたとされます。その際、他の書物には裏同士を貼り付けた永楽銭を投げて勝敗を占ったとも、願文がんもんを奏上するや本殿の裏で甲冑の触れ合う音が聞こえ、白鷺が飛翔したとも記されています。家来を率いて今川軍に臨むため東へ向かった信長は、途中、梁田政綱より、今川軍は桶狭間で休息中との知らせを受けて桶狭間で今川義元を討つことができました。画中には膝まずく梁田政綱と知らせを受ける織田軍の様子も描かれています。また、その近くには先述した白鷺も2羽、翼を羽ばたかせているのが見えます。そして、肩衣姿の信長の背後には戦勝のお礼として当神宮に寄進した土塀（信長塀）も垣間見えます。

さて、桶狭間の合戦から15年後の（1575）天正3年5月、織田・徳川連合軍は長篠ながしの（愛知県新城市）しんしろにおいて

武田軍と激突します。岐阜より家康の居城である岡崎へ向かう信長は13日に熱田に着陣します。左の書状は、2日前の5月11日に信長より当神宮の権宮司を務めていた田島仲安宛てに出された黒印状です。内容はご祈禱のしあわびと熨斗鮑のしあわびの到来に感謝するとともに、近日中に三河国に向かうので、その途中で是非お会いしましょうと記されています。当時、当神宮の別宮である八剣宮はっけんぐうは修理が必要な状況であつたらしく、この折に大工・岡部又右衛門に八剣宮の造営を命じています。

当神宮の大宮司家が信長の家臣団の一員として活躍していたということもありますが、尾張国生まれの信長にとってこの熱田神宮は、領地支配もあり、美濃国・近江国に居城を移しても常に思いを寄せてくれる、常に気に掛けていた格別な存在だったのかも知れません。（続く）